



## イングリッシュマラソンのシンガポール研修を体験して

国際文化コース2年 新井 ゆう

私は教育文化学部地域文化学科の国際文化コースに所属し、ほかの国の文化を学び、理解したり受け入れたりするための勉強をしています。しかし、実際に海外に行った経験がなく、「異文化」というものにぼんやりとしたイメージしか持つことができいていませんでした。そこで、今回イングリッシュマラソンに参加して異文化を体験しようと思いました。

シンガポールで気づいた日本との違いは、二つあります。一つ目は、客への対応です。日本では、店側が“お客様”に対して丁寧な対応をするのが一般的です。私も飲食店のバイトをしているときには、“お客様”第一で働いています。



しかし、シンガポールでは、店員が笑顔であることはめったになく、注文を取られる際には、店員の尋ね方が少し怖いと感じるときもありました。日本の接客に慣れていた私は、このような違いに驚きましたが、働く人の立場に立ってみるとシンガポールはとても働きやすい環境であると考えました。日本は、常に笑顔で丁寧に接することが求められてストレスを感じるときもあります。シンガポールのような働き方ができるなら、働く人のストレスも減少するかもしれないと感じました。文化が違うことでどちらの立場が優先されるのかも変わり、人々の対応も変わることを学びました。

二つ目は、外食文化です。日本では、外食は毎日するものではないことが一般的です。しかし、シンガポールの人々の多くが毎日外食していることを現地での授業で知りました。実際に、私たちも授業の後にホーカーセンター（飲食店の屋台が集まっているところ）に行ってみたところ、平日にも関わらず多くの人が食事をしていました。仕事の後に食事の準備をする必要もなく、男女関係な

く仕事に取り組むことができるのでとても魅力的な文化だと思いました。また、シンガポールは食文化が多様なので、私たちはチャイナタウンやリトルインディア、カンポングラムなどでさまざまな国の食を体験することができました。

今回のシンガポール研修で二つの違いを発見し、文化の多様性を学ぶだけでなく、その国の人が求める「生きやすさ」とは何か、その国の人が優先していることは何かについて考えるきっかけになりました。この視点を生かして今後の授業に取り組みます。

英語教育コース2年 小熊 萌々

私は今夏、9月15日から27日にかけてイングリッシュ・マラソンメンバーの一員としてシンガポールに海外研修に行ってきました。この2週間の滞在は私にとってとても有意義で良い経験となりました。私がそこで何を体験してきたのか、また行く前と後での学習について紹介したいと思います。

2週間という期間の中で、私は語学学校でシンガポールの文化について学びながら、日本語禁止というルールのもと、生活をしてきました。授業の中で一番記憶に残っているのは、校外での学習です。シンガポールは様々な国の人が生活しているということもありそれぞれの人達の慣習に合わせた建物や町が多くありました。少し歩くだけで景色がガラリと変わり、同じ国にいるのに、多くの国を旅行しているような気分でした。そこでは、昔に移住してきた人達の暮らしを博物館でガイドの人から話を聞いたり、実際に参拝している様子を見たりすることができました。また、生活している時にシンガポールで話される強く訛のある英語「シングリッシュ」を聞く機会がたくさんありました。シンガポールに行く前にシングリッシュについて学びどうい言葉があるのか勉強してはいました。でも、最初の方は聞き取ることが難しく、ちゃんと聞いていないと授業でも困ることが多々ありました。しかし、日数を重ねるごとに耳



も少しずつ慣れ楽しく先生達と会話もすることができました。

今回の研修を通して、同じ英語といっても発音、話し方は国によってかなり変わってくるということを、身をもって感じました。勉強するだけではなく実際にその英語を

使っている地域で生活することの大切さを学ぶことができたので本当に良い経験でした。これからは、TOEIC に向けてシャドーイングの方法を使って、様々な種類の英語を聞き分けられるように引き続き勉強したいと思っています。また、ALLROOM に行き、留学生やスタッフと話すことでスピーキング力が今のレベルより下がることのないようにしたいです。

#### 教育実践コース2年 福永 遥亮

私は大学生になり、中学生から学習してきた英語を学べる機会が最後になったことに気がきました。また、このまま英語を扱えないまま卒業することがもったいなく感じていたため、English Marathon への参加を決めました。

English Marathon の本格的な活動は2年次の4月から始まり、週に3回以上ALL ROOMSに通うことが義務づけられました。また参加者は、共通の単語帳を購入し、6月にある単語テストを通過することが、夏休みにあるシンガポール研修への参加条件になっていました。

シンガポールでの滞在期間は2週間で、RELC という語学学校に宿泊しました。また、滞在期間中は授業のみならず、日常生活に至るまでも、全て英語を使って生活しました。授業は午前と午後の2時限構成で、シンガポールの文化について学ぶクラスとプレゼン能力を磨くクラスが主でした。

シンガポールは多民族国家で、主に中華系、マレー系、インド系の人たちが大多数を占めています。また、シンガポールはマラッカ海峡の出入り口に位置することから、昔からヨーロッパ世界やイスラム世界と中華世界間の交易の拠点となっており、今でも多くの外国企業が拠点を構えるビジネス都市としての役割も担っています。このように、多くの人たちが暮らす都市ですが、過去には宗教・ライフサイクル・利害などの対立を防ぐために住み分けをしていました。今でもその名残はあり、民族ごとの特色ある町がいくつかありました。私達はクラスで民族について学習した後、実際にその民族の特色が残る町に出向き、先生やガイドの案内の下、食文化や歴史などにも触れてきました。

English Marathon の活動は私の英会話に対する抵抗感を取り除いてくれました。また、シンガポールでの生活で、今まで学習してきた内容を活かせば、相手に考えを伝えることができるのだということが分かり、自信にも繋がりました。今後もシンガポール感じた気持ちを忘れずに、精進していかなくてはならないと、私は感じました。



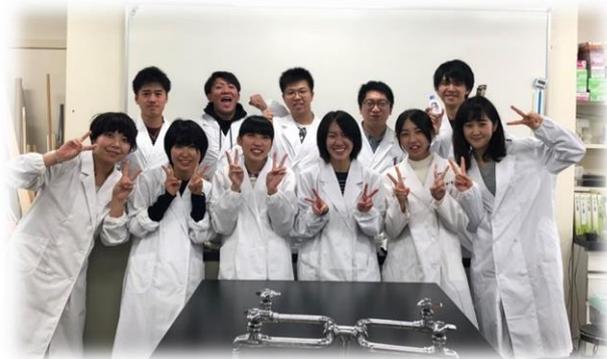
### 10月26日・27日第53回大学祭「はみから」が開催



## 理数教育コースの学び

### 理数教育コース理科専攻3年次 長門明日香

私たち理数教育コースは、文系要素の強い教育文化学部所属しながら、教育学とともに理科や数学を中心とした学びを深める、理系要素の強い、少々異色なコースです。1年次から数学専攻と理科専攻に分かれ、「理数」という言葉に対する抵抗がなくなり、主体的に学習に取り組む児童・生徒を育成するために、日々趣向を凝らした授業づくりや専門分野の探究に励んでいます。



私が専攻する理科は、1年次で物理・化学・生物・地学の基礎を学び、2年次では、それらの少々発展的な内容を学習します。そして、学んだことを生かし、身をもって自然の事物・現象を体感する基礎実験の授業が行われます。この実験の授業の目的は、将来教員となった際に指導者として、正しい手順と論理で実験を行うためのもので、大変有意義な授業です。ですが私は、もうひとつ、とても大切なことが学べるのではないかと考えます。それは、共に学ぶことの楽しさです。実験の授業では、仲間と協力しながら実験方法を話し合ったり、実験結果を考察したりする機会がたくさんあります。その中では、多様な意見を交わすこと、互いにアドバイスをすることがとても大切です。そして、これらの過程を経て学んだ知識は、一人で見向き合って得たものよりはるかに深く、長く記憶に残ります。

私は、実験を通して、自ら知識を得ることは学ぶことの楽しさであることを大学に来て初めて知りました。また、物理・化学・生物・地学の得意分野を互いにカバーし、一人であれば音を上げてしまいそうな難しい実験も、仲間と知恵を出し合うことで乗り越えることが出来ました。そして、実験をすべて終えた1年後、理科専攻の仲間と格段に仲が良くなっていました。

理数教育コースは、主体的で対話的な深い学びが求められる今日の教育現場に将来立つのであろう身として、学び合いの重要性を自ら学ぶことが

できるという素晴らしい価値も持ち合せ、仲間との深い友情も芽生える、大変魅力的なコースです。

### 理数教育コース数学専攻4年次 松崎広希

私は、教育文化学部学校教育課程理数教育コースで学んでいる4年生です。理数教育コースの数学専攻の学生が所属している数学教育研究室では、幾何学、解析学、代数学、統計学だけでなく、数学教育についても学ぶことができます。様々な専門的な知識を学ぶだけでなく、数学教育に活かさないかと探究していくことができます。

数学教育研究室と聞くと、「難しい数学の問題を解けるように勉強しているだけなのでは?」と思われる方もいるかもしれません。実際は、自分が教師になったらどのように学びを活かせるかという視点を常に持ち、様々な授業を通して教師としてのスキルを磨いています。また、この研究室は人と人のつながりを大切にしています。同学年の学生だけでなく、他学年の学生、留学生、先生方を交えて、親睦を深めるためのスポーツ大会や、新入生歓迎会、歓送会なども学生が力を入れて行っています。この活動をきっかけに仲を深めて、日頃の授業で教え合うことや、研究室の先輩や先生方にわからない問題について問いかける場面もよく見かけます。学生同士だけでなく、先生方とも距離が近く、居心地のよい空間があるのが、この研究室の特徴です。

数学教育研究室の先生方は、それぞれの専門分野で秀でているだけでなく、幅広い知識をもとに、学生と沢山話してくれる方々です。実際に現場で教師として活躍されていた先生方もいらっしゃるため、積極的に話すことが自分の人生に役立つこと間違いなしです。

以上のように、理数教育コースの数学専攻の学生は、数学教育研究室に所属し、勉強だけでなく、豊かな人間関係を育み、充実した大学生活を送ることができます。研究室のメンバーがひとつになって学んでいける点が、この研究室の最大の魅力だと思います。



## 秋田大学 70 周年記念事業「学生プロジェクト発表」 「未来を担う秋田大学生たち」が開催

9月28日(土)、カレッジプラザにて表記の催しが開催されました。高校生を中心にして会場いっぱい150名ほどが参加しました。

第1部の学生プロジェクト発表では、教育文化学部の「地域連携プロジェクト」の発表が以下の2グループからありました。

①「太陽印刷株式会社」実習報告～地域の資源を冊子で紹介～

発表者：佐々木綾乃、高橋今日子、武田明日香

②「有限会社都市クリエイティブ」実習報告～旅行を企画する～

発表者：池田圭佑、清野良太

理工学部からは「産業連携教育プログラム」として、

①「横手精工チーム」Iot を利用した保管庫の温湿度管理システム

②「エコリサイクルチーム」エコフェア集客プロジェクト～小型家電リサイクルの促進に向けて～

医学部保健学科からは

①地域とともに活動する「秋田大学キャンパスサポーター部」活動報告

②「秋大医学部地域とつながり隊」活動報告が行われました。

第2部では、パネルディスカッションで、太陽印刷株式会社、横手精工株式会社、藤里町社会福祉協議会の方、秋田北高等学校と新屋高等学校の高校生、教育文化学部の高橋今日子さん、理工学部の有坂拓哉さん、医学部保健学科の石岡明莉さんが登壇し、臼木智昭学長補佐がモデレーターを務めて、産業成長や地域発展のために秋田大学や大学生が果たす役割等について協議しました。



### 70周年記念事業に参加して

#### 地域社会コース 4年 高橋今日子

9月28日(土)に秋田市中通のカレッジプラザで開催された秋田大学70周年記念事業「学生プロジェクト発表」にて、私たちは昨年取り組んだ地

域連携プロジェクトゼミの実習報告をしました。このゼミでは、昨年の5月から10月にかけて、秋田市卸町の太陽印刷株式会社さんと共に実習を行い、地域の魅力発信マガジン「あきじん」を制作しました。

実習の目的は、1つ目が「あきじん」の制作を通して、誰に、何を、どうやって伝えるかを体感し、地域の活性化の方法を考察すること、2つ目が地域の活性化のために印刷・広告業は何ができるか、そして自分自身が目指す職業と照らし合わせて、その役割がどのようなものかを考えることでした。

昨年はこの実習で得た経験をこれからの就職活動に活かしたいと思い、その思いを発表の総括としました。就職活動を終えたいま、実習のどのような経験が生かされたか、そしてこれから働くうえで意識したいかが昨年に比べて明確になってきました。第1部での発表終了後、第2部のパネルディスカッションでは、現時点での振り返りや将来の働き方について高校生の皆さんに伝えることができたと考えていました。

第1部の学生プロジェクト発表では、地域文化学科のほか理工学部、医学部保健学科の学生が発表を行いました。他学部他学科のプロジェクト発表を聞く機会はあまりなかったため、貴重な時間となりました。



第2部では、まず初めに秋田北高校、新屋高校から2名の学生が高校での取り組みについて紹介しました。私は県内高校の出身ですが、地域に根ざした活動を行ったのは大学に入ってからだったため、その行動力や企画力に驚かされました。特に、新屋高校での取り組みは地域文化学科のカリキュラムに近い部分がありとても興味深いものでした。

その後、秋田北高校・新屋高校の学生2名、秋田大学生3名、社会人3名(太陽印刷株式会社、横

手精工株式会社、藤里町社会福祉協議会の方)が登壇し、臼木智昭先生司会のもとパネルディスカッションを行いました。私は教育文化学部の代表として登壇し、意見を述べました。

昨年の実習では、対象地域に出向いて取材を行い、それを文章にするという作業を繰り返してきました。その作業のなかでは常に物事の本質を見失わないようにすることを心掛け、「なぜこの仕事をするのか」「なぜこの方法なのか」等深く追求する姿勢を大切にしました。これは、「あきじん」の記事を豊かにするために必要なことで、得るものも数多くありました。しかし一方で、触れがたい問題に直面して、本質を捉えながら魅力が伝わるような文章作りに悩み、葛藤することもありました。

私は、この経験をゼミのメンバーで乗り越えたこと、何層も深く追求する考え方が就職活動で役

立ったことをパネルディスカッションで話しました。高校生の皆さんに、私が秋田大学で得たことや感じたことが少しでも伝わっていたら大変うれしく思います。



## 秋田大学、秋田北高校と高大連携協定を締結

秋田大学（山本文雄学長）と秋田県立秋田北高等学校（木浪恒二校長）は、10月10日、お互いの連携を強化することにより、秋田における次代の新たな社会をリードする人材を大学と高等学校との連携した学びの中で育成することを目的に、高大連携協定を締結しました。

本学教育文化学部と同高が平成19年3月に締結した連携教育協定を全学部に拡げることで連携を強化し、更なる人材育成の充実を目指すことをねらいとしています。具体的には、「大学の講義に高校生の聴講を受け入れる、大学教員が高校生に特別授業を行う、大学が企画したフィールドワークなどのプログラムに高校生を受け入れる、高校の補習授業などで大学生が指導体験を行う、高校の教育活動に大学教員が指導・助言する、教育課

題の共同研究を行う」などについて連携事業を行います。

協定締結式では、木浪校長からは「連携協定を教育活動の充実に繋げ、地域に貢献できる人材を育成したい」、山本学長からは「高大連携を推進することで高校生の進路意識の啓発や、教員を目指す学生にとってのインターシッピング的役割を果たす連携を進めたい」と挨拶がありました。

【全学HPより転載】

## 10月19日、第5回ホームカミングデー開催

湊三郎先生（秋田大学名誉教授、本学部卒業生）、三浦亮先生（元学長、元医学部教授）、牧野和孝（元副学長、元工学資源学部教授）による記念講演の後、交流会が学生会館1階で行われました。旭水会の会員によるバンド（フォーグレイス）による演奏もありました。



協定書に署名し、お互いに握手を交わす山本学長（右）、木浪校長



## 第7回あきたの教師力高度化フォーラムを10月12日秋田市文化会館で開催

### 教職実践専攻2年次 渡辺 雄介

あきたの教師力高度化フォーラム第1部では、宮城教育大学教授の安藤明伸先生より「プログラミング教育で子どもたちにどのような力をつけさせるのか」についてご講話をいただきました。学習指導要領の改訂により新しく教育課程に盛り込まれたプログラミング教育について、指導に不安を抱えている教育関係者も多いのが現状ではないかと思えます。今回の講話では、プログラミング教育のねらいや特性、実践例などについてお話していただきました。

小学校でのプログラミング教育の実施にあたっては、まずコンピュータを活用する楽しさや面白さ、ものごとを成し遂げる達成感を子どもたちに味わせることが重要であるとのことでした。楽しさや面白さを味わうことによってプログラムのよさ等への「気付き」を促し、コンピュータ等を活用する意欲を喚起することができます。さらに、学習活動への意欲の高まりは、「プログラミング的思考」の育成や各教科等の学びの充実へとつながります。プログラミングは、いわゆるアクティブラーニングと相性の良いものでもあるため、学校・クラスの実態に即して「プログラミング的思考」の育成を適切に組み入れていくべきであるとのことでした。

私自身もこれまで学校現場でプログラミング教育の実践をいくつか見る機会がありました。学校や地域によって差はあるかとは思いますが、ここ数年間で機器や設備などのハード面では普及が進みつつあるように感じます。また、教材(ソフト)も操作が簡易で子どもたちにとって抵抗の少ないものが増えてきている印象です。しかし、課題として教師側の指導の経験が少なく、授業内で十分に指導性が発揮されていないケースがある点が挙げられると考えます。子どもたちにプログラミング的思考を意識させるような言葉かけや、コンピュータのことを理解させるための指導、プログラムのよさ等への気付きを促す授業展開といった教師の働きかけがますます重要となってくるでしょう。

### 教職実践専攻1年次 遠藤 史都

第2部では「これからの秋田のプログラミング教育を考える」をテーマにして、林良雄先生をはじめ、廣田千明先生(秋田県立大学システム科学技術学部准教授)、大久保武彦先生(秋田市立四ツ小屋小学校教諭)、安藤明伸先生をパネラーとしてパネルディスカッションが開かれました。



このパネルディスカッションのなかで印象的だった言葉があります。それは、プログラミング教育の「食わず嫌い」です。2020年度から必修化されるプログラミング教育ですが、正直「何をすればいいの?」「何のためにやるの?」「どんな成果が得られるの?」などといった疑問が残っている人も多いと思います。このようにプログラミング教育をなかなか実践しようとしないうことを、パネルディスカッションの場では「食わず嫌い」と表現されていました。この表現は的を射ていると思います。なぜなら、私自身もプログラミング教育を「食わず嫌い」していたからです。「プログラミング教育…? 本当にそれって必要なの? もっと別な教科等に時間を使えばいいんじゃないの?」などと、プログラミング教育について斜めに見ていました。

しかし、このパネルディスカッションを通して、この見方はすぐに改めなければならないと感じました。プログラミング教育は誕生して間もない教育です。そのため実践例が少なく、実際にどのようなことを通して、どのような力がつくのか、具体的にイメージすることが難しいのは当然のことです。それだけの理由でプログラミング教育を「食わず嫌い」してしまっただけでは実にもったいないです。

そこで、私はプログラミング教育を積極的に実践していきたいと考えるようになりました。私はまだ20代の若者です。教育に関してベテランの先生方のようなノウハウは全くありません。だからこそ、新しいものを積極的に取り入れていく必要があると思うのです。失敗してもいいから、まずはやってみる。このチャレンジ精神を若者である私の強みにして、プログラミング教育の発展に携わっていきたいです。

## 教職大学院の研修旅行で宮城の被災地等を訪問

教職大学院が 2016 年度に発足して以来、2016 年岩手、2017 年宮城、2018 年岩手と続き、今年 2019 年はまた宮城の被災地を訪問しました。日程は以下のようになります。

10 月 25 日 (金)

- 9:00 秋田大学正門発
- 13:00 仙台市震災遺構荒浜小学校跡見学
- 15:00 宮城教育大学で教職大学院交流会
- 17:20 宮城教育大学萩朋会館で懇親会
- 19:30 仙台サンプラザホテル着

10 月 26 日 (土)

- 8:30 仙台サンプラザホテル発
- 10:00 石巻・大川小学校跡見学  
雄勝で防災教育・復興教育の講習会  
雄勝ローズファクトリーガーデン視察
- 講師・案内：元雄勝小学校教師の徳水博志氏
- 16:00 雄勝発
- 16:30 石巻グランドホテル着
- 17:30 ホテル近くの「ごくう」で夕食

10 月 27 日 (日)

- 9:00 石巻グランドホテル発
- 9:45 南三陸ポータルセンター着  
語り部ガイドが同乗して被災地を視察  
南三陸町観光協会「学びのプログラム」  
南三陸さんさん商店街視察
- 11:50 センター近くの「志のや」で昼食
- 12:30 南三陸ポータルセンター発
- 16:00 秋田大学正門着

の影響が心配されましたが、25 日の夕方に強い雨が降っただけで、他はほぼ雨もなく晴れの時が多く、それほど寒くもなく、天候には恵まれました。この研修は教職員支援機構のプロジェクトの一環として実施しました。

本研修旅行は、第一に、教職大学院にとって修学旅行的な意味合いを持っています。3 日間にあたる非日常的な空間、時間において、生活と共に、学びの経験を濃密に共有することで、教職大学院の院生間の団結力を強め、強烈な思い出として共有されます。

第二の意義は、魂が揺さぶられるような体験を積むことです。震災の様子に触れることで、自分の生き方、人生観、教育観が揺さぶられることがあつてしかるべきでしょう。ただの事実、知識として、平板にしか感じ取れないのでは、教師として問題があるのではないのでしょうか。

第三に、危機管理の意識を高めることです。2011 年 3 月 11 日の東日本大震災から 8 年半が過ぎ、1983 年 5 月 26 日の日本海中部地震からは 35 年ほどが経過し、風化しつつあるような状況です。大川小学校の災害については今年 10 月 10 日に最高裁が上告を退け、2018 年 4 月 26 日の仙台高裁控訴審判決が確定したばかりです。子どもたちの命の尊さ、そして、それが失われることの悲しみの深さを、教師としては深く心に刻むべきところです。

第四に秋田県内に閉じこもるのではなく、他県、特に東北地区の県と交流し、視野を広げることができます。他県との間の教育状況、教育課題、県民性の違いなども感じ取ることができます。



宮城教育大学教職大学院との交流会

参加者は、教職大学院院生 19 名（現職院生 10 名、学卒院生 9 名）、教員 2 名（25 日交流会まで 3 名）でした。宮城教育大学からは現職 9 名、学卒 7 名、教員 7 名の参加がありました。台風 21 号



仙台市震災遺構・荒浜小学校跡：2 階の床上まで浸水し、がれきが 2 階にまで入った。子どもたちや付近の住民は上階に避難し、ヘリコプターなどで救助された。



石巻市・大川小学校跡（右端が徳水氏）  
震災前、まわりは多くの民家に囲まれていて、川の方を見ることはできなかった。



南三陸町：戸倉中学校跡（現在は公民館として使用）：津波に襲われる間際までグラウンドに避難していて、1年生の男子生徒と教諭の2名が犠牲となった。左端はモアイ像のレプリカ。



大川小学校裏手高台から  
子どもたちは普段からここに来ていたが、ここには避難せず、グラウンドに長く待機し、最終的に川の方の少し高いところに向かい津波の犠牲となった。



戸倉中学校跡：海拔 20 メートル程度の高台にあるが、津波は 30 メートル程度にまでなり、1 階が水没した。2 階は無事であった。津波警報の予測は 10 メートル程度であったが、地形等によって想定外の高さとなりうるということがわかる。



石巻市・復興まちづくり情報交流館・雄勝館で徳水氏の講話を聞いた。



南三陸町の元防災庁舎の上が見える場所。全体に約 10 メートルかさ上げされている。南三陸さんさん商店街そば。

【文責：佐藤修司】

【研究紹介】

**フランス・パリ・アカデミーの教職大学院  
—初等教員採用試験に向き合う音楽科目の授業方針—**

教育実践講座 吉澤 恭子

1. フランスの教職大学院～初等教員養成を担う高等教育機関

かつて IUFM と呼ばれていたフランスの教職大学院は 2013 年 9 月に ESPE (Ecole supérieure du professorat et de l'éducation) と名称を変え、教育課程も再編され、新たな運営方針をもつ高等教育機関に生まれ変わった。この教育機関は、現在フランスの 5 つの海外県 (グアドループ、ギアナ、マルチニック、マイヨット、レウニオン) を含む 31 のアカデミー (大学区) に設置されている。近年フランスで実現されてきた教育改革の一つに、初等教員 (保育学校教員・小学校教員の総称) の修士号の取得義務化がある。この義務化に伴い、教職大学院 (以下、ESPE) は、将来教職を目指す者への教育実習を含む様々な初期教育を提供する場であるだけでなく、国家試験である初等教員採用試験の準備対策をも担う高等教育機関として機能している。

現在のパリ・アカデミーの ESPE では、正規の初等教員になるには図のようなプロセスを経る。ESPE への登録条件は、大学卒業生 (学士号取得者) である。修士課程 1 年在学中に、初等教員採用試験を受検する。採用試験は二段階選抜 (第 1 次試験・第 2 次試験) による。合格者は、新年度が始まる 9 月から 1 年間、週の半分を ESPE の修士課程 2 年に在籍する学生として、週の半分を配属された初等学校で試補教員 (研修生) として過ごす。研修生の身分であるが、国家公務員としての給与が得られる。修士課程 2 年目には学位取得に必要な学業を続けながら現場での教職経験を積み、最終審査に合格した後に修士号を取得し、ようやく正規教員として採用されるのである。



パリ・アカデミーの ESPE (Molitor 校)



図：正規の初等教員になるまでのプロセス

2. パリ・アカデミーが実施する初等教員採用試験・第 2 次試験の選択状況

2017 年度のデータによれば、パリ・アカデミーの ESPE に在籍する 368 名の初等教員採用試験受検者の合格率は第 1 次試験が 83%、第 2 次試験が 72%、最終合格率は 60%であった。フランスの初等教員採用試験では、第 1 次試験に筆記試験 (フランス語、数学) が課され、「体育」を除くその他の教科領域 (科学と技術、歴史、地理、倫理教育・市民教育、視覚芸術、音楽、芸術史) は第 2 次試験 (口述試験) の選択科目に位置づけられている点は興味深い。第 1 次試験の合格者は、合格発表後に 7 分野より選択した一分野の課題書類を作成・申請し、2 次審査に挑む。以下の表は、2017 年度にパリ・アカデミーが実施した初等教員採用試験・第 2 次試験の分野別選択状況である。

順位	分野	第 1 次合格者数	第 2 次受検者数	比率
1	科学と技術	195	176	27,46 %
2	歴史	128	118	18,41 %
3	倫理教育・市民教育	89	87	13,57 %
4	視覚芸術	81	78	12,17 %
5	音楽	77	70	10,92 %
6	地理	75	68	10,61 %
7	芸術史	50	44	6,86 %
	合計	695	641	100,0 %

Académie de Paris, Rapport de jury, Concours de recrutement de professeurs des écoles (CRPE) Session 2017, p. 22 を基に作成。

3. 初等教員採用試験「音楽」に求められる教科の資質・能力育成に関わるパリ・アカデミーの ESPE・修士課程 1 年目の授業の枠組みと開講時期

初等教員採用試験・第 2 次試験「音楽」では、書類審査と口述試験 (音楽の授業を想定し、音源等の提示を含むプレゼンテーション力の審査) が課されている。フランスの小学校課程には音楽教科書が存在せず、プログラムには特定の音楽教材も指定されていないため、教材の選択から教材の内容理解をふまえた授業構想・企画力、実践場面を想定した指導案作成力を含む資質・能力が、採用試験で審査される。2017 年度の分野別選択状況から見ても分かるように、全体の 1 割程度しか「音楽」で受検する者はいない。ESPE の修士課程 1 年目のカリキュラムでは、音楽教科に関わる授業は全て選択科目である。年間の授業の枠組みと開講時期は、音楽教育に関わる講義・演習 (10 月～1 月)、第 2 次試験で準備すべき書類・指導案等の作成および添削指導 (2 月～4 月)、口述試験を想定したプレゼンテーションの実施 (5 月) となっており、授業の運営方針は、第 2 次試験を「音楽」で受検する者への試験対策に重点がおかれている。

【学部HPから転載】

## 学生運動の様相—学部の歴史をたどる⑱

戦後すぐのまだ師範学校の時、1945年10月25日には男子部1年130名が学園民主化を求めて、同盟休校、ストライキを起こしています。そこでは、教員間の広島高師・東京高師・諸学校の出身者派閥の一扫による学園の明朗化、教職員の圧制的な指導方針の廃止、学校配給物資の公正化などが求められていました。全国的に同じようなことが起こっていて、戦前、戦中に行われていた軍国主義教育や、管理主義的な手法に対する学生・生徒の不満の表れでもあったでしょう。

1946年10月には、生徒自治会委員が、顧問などの学校の許可を得ずに、全校自治会を試験時間に開催したことに対して、退学処分、無期停学処分などが行われています。1947年には2・1ゼネスト中止や、1948年6月の114大学20万人の学生によるストライキが行われ、9月に全国学生自治会総連合（全学連）が結成されています。民主化とともに、戦後の物不足に対する不満などから全国的に労働組合運動や学生運動が組織され、盛り上がった時期です。

学芸学部となって、1950年には、学生と教員とで構成される「青芝会」が組織され、会が主体となって学部祭や講演会、演芸会等が行われましたが、2年程度で解散してしまいます。学生のみ自治会を作ろうとする要望が強かったためようです。1949年、1950年にはレッドパージが全国的に広がっていましたが、大学でそれを進めようとしていたイールズの講演会を新潟大学で学生が阻止するなどの学生運動の結果、大学でのレッドパージはほぼ行われませんでした。朝鮮戦争、東西冷戦激化などを背景として、反共産主義・社会主義的な動きが強まっていました。

1954年には、「学生会」が作られ、新入生歓迎会、送別会、大学祭、運動会、球技大会、音楽祭などを実施しただけでなく、原水爆禁止運動に参加したり、教育系大学ゼミナールの活動も行われていました。1960年の日米安全保障条約への反対運動が全国的に広まり、東大の女子学生が国会前の学生デモと警官隊との衝突で死亡する事件が起きています。秋大でも学生による無届集会や授業放棄、安保反対の街頭デモなどが行われ、問題とされていました。

1967年6月に、学芸学部から教育学部への学部名や課程名の変更などに対する学生の反対運動が大きくなります。学部等の名称変更は学部教授会が望んでものではなく、やむをえなかったものなのですが、教授会決定に対する学生の抗議集会が行われ、全学闘争会議が結成されています。その後、バリケードが作られ、学生の座り込みで教授

会開催が阻止されたり、学部長が軟禁状態となったりしました。

1969年1月20日には、選出された新学部長の就任を拒否して、学生が学部長室にバリケードを築き、占拠します。学部長選挙の白紙撤回と、教職員・学生全員による投票を要求します。この封鎖は6月17日まで続きます。2月14日には学生会が学生部を封鎖し、さらに、3月1日には学長室などの本部事務局の建物を封鎖し、学長団交（団体交渉）を要求します。4月11日の新年度ガイダンス行事は一部の学生の妨害で中止になり、15日に学部毎の入学式が行われることとなります。この際にまた一部学生が「入学式粉碎」を唱えて、鉦山学部の会場の体育館が封鎖され、教育学部では、入学式に参加しないように呼びかけたり、ピラをまいたり、式場周辺でジクザクデモを行って、その後会場に突入し、警備の教職員に対して暴行を加え、入り口のガラス戸を突破して内部に乱入して入学関係書類を奪うなどの行為を行っています。



バリケード（昭和43年6月）

5月20日にはサークル部室が火事になる事件が起きています。この際に警察が学内に現場検証で立ち入る際に学生側と衝突しています。学長が健康上の理由で辞任し、6月10日に学長代行が就きます。6月16日に学生側は学長代行を17日未明まで事実上軟禁状態に置き、また本部事務局を封鎖します。封鎖のため、大学の種々の業務が滞ってしまいます。大学側からの要請で、7月11日に機動隊450名が大学に入ります。学生は投石と火炎瓶で対抗しますが、機動隊が近づくと逃走し、1時間半ほどで完全に封鎖が解除されました。封鎖は学生部で5か月、本部で1か月に及びました。

同じ1969年8月7日に「大学の運営に関する臨時措置法」が公布され、9月20日に教育学部の建物、22日に鉦山学部の建物の封鎖事件が起きていますが、1970年6月の「安保粉碎」を掲げた際に

はストライキだけで、封鎖はありませんでした。その後は大きな事件は起きずに今に至っています。

この当時、授業料値上げ反対、大学運営の民主化、学生寮や学生会館等の管理運営問題、学生処分反対などとともに、日米安保、ベトナム戦争、産学協同などへの反対も大きな要求となっていました。1970年代は反核(兵器)や、反原発もよく掲げられていました。「全構成員自治」も大きな要求で、大学が教授だけでなく、全教員、さらに他の職員、そして学生も参加した形で大学運営がなされるべきだとの主張が多く行われます。

今の学生は知らない人も多いと思いますが、ストライキというのは授業放棄のことです。自治会の大会などで学生が投票し、過半数の賛成があればストを行っていました。授業に出ずに遊びに行く学生もいたでしょうが、基本は学内や学外で行われる集会に参加して、いろいろと活動します。

そこではデモ行進がよく行われました。デモンストレーションの略です。学内や、学外の公道をプラカードや旗などを掲げ、マイクなどでスローガン、シュプレヒコールを叫びながら、時に歌(労働・平和・政治・社会運動などに関わる歌)を歌いながら集団で行進します。この際、手をつないで道いっぱい広がって行進することをフランス・デモと言います。また、ジグザグ行進をして、やはり学内の通り道や公道を占拠してしまうようなデモも大学紛争の時代にはよく行われていました。(デモは合法ですが、無届、交通妨害は違法です。)

その際、学生はヘルメットをかぶり、サングラスやマスクなどをして、個人が特定されないようにしていました。また、瓶にガソリンや灯油を入れたものに布を差し込み、火をつけて投げることも行われました(決してまねしないように)。投石や、角材(「ゲバ棒」ゲバルト(独語):暴力の略)で殴るなどのこともありましたので、ヘルメット

は必需品でした。警察や教職員と衝突するだけでなく、学生運動の派閥・セクト間の対立もあり、全国的に大学全体が騒然としていた時代です。



封鎖解除の新聞報道(昭和四十四年・秋田魁新報)

学内では学生たちの主張を述べた「ビラ」が大量にまかれ、教室にも散乱していました。主張を書いた立て看板も多く立てられていました。バリケードはバリケードをはったストライキのことです。

その後、一部の学生運動は過激化し(「過激派」)、日本赤軍のよど号乗っ取り事件や浅間山荘事件、企業爆破事件、リンチ、内ゲバなどが起こりますが、多くの学生は政治的無関心の傾向を強めていきます。無気力、無関心、無感動など、三無主義が広がります。そこに新興宗教などが学生への影響力を強め、統一教会やオウム真理教などが社会問題化します。また、大学運営に対する関心も薄まっていったようで、秋田大学も自治会組織がなくなって久しくなります。最近では学生の保守化や、ネットウヨ(ネット右翼)などもよく言われます。

暴力的、扇動的なものは否定されるべきですが、平和的、建設的な形での学生参加は推進されるべきものです。本学部の学生協議会がそのようなものとして機能することを期待しています。

【創立百年史より 文責:佐藤修司】

発行 秋田大学教育文化学部／教育学研究科

〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 TEL 018-889-2509 FAX 018-833-3049

教育文化学部・教育学研究科HP <http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/>

学部研究科通信「みなおと」バックナンバー⇒[http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu\\_magazin.html](http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_magazin.html)

教職大学院通信「暁鐘の音(かねのね)」⇒[http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate\\_magazin.html](http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/graduate/graduate_magazin.html)

\* 誌名「みなおと」の由来である秋田県女子師範学校校歌(1910年制作)を聴くことができます。

[http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu\\_symbol.html](http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/guide/gu_symbol.html) をご覧ください。